

吉野山における観光客数の推移と季節性

小 田 匡 保

I. はじめに

奈良県の吉野山は、桜や南朝の史跡などで知られる古くからの観光名所である。大正13(1924)年、当時の史蹟名勝天然紀念物保存法によって史蹟及び名勝に指定され、昭和11(1936)年には吉野熊野国立公園の一部に指定されている。

吉野山の観光についての地理学的調査は、昭和47(1972)年に出版された『吉野町史』に見られる。観光の章の多くを担当した堀井甚一郎は、観光の発達、観光客、観光産業などについて、具体的データを提示しながら要領よくまとめている¹⁾。吉野山の観光地理について知ることのできる貴重な文献である。しかしながら、調査から30年近くの年月が経っており、データの古さは否定するべくもない。

そこで本稿では、堀井の後を受け継ぐ形で、吉野山の観光について筆者が調査した結果を、特に観光客数の推移・出発地・季節性に焦点を当てながら報告することにしたい²⁾。

II. 吉野山への観光客

1. 観光客数の推移

観光客数について地域別のデータを知ることのできる全国的な統計に『全国観光動向』³⁾がある。この統計は都道府県ごとに依拠している資料が異なるが、奈良県の場合、『奈良県観光客動態調査報告書』⁴⁾(以下、『動態調査報告書』と略記)に基づいているので、以下においては、まず后者の資料をひもとくことにする。

『動態調査報告書』における地域別統計には、「吉野山」という地域名がある。この「吉野山」は、いわゆる地理的名称としての吉野山(大字吉野山)の範囲だけではなく、同じ吉野町内の宮滝と津風呂湖を含んでおり、注意が必要である⁵⁾。そこで本稿では、宮滝と津風呂湖を含む観光統計単位としての「吉野山」を、以下「吉野山エリア」と表記することにする。

吉野山エリアへの観光客数は、表1と図1に示したとおりである。最も古いデータのある昭和46年⁶⁾以降観光客数が増加しており、昭和51年には100万人を超えた。最大で120万人近くになった観光客数も、昭和58年から激減して100万人を割り、昭和63年には70万人強にまで減少した。しかしその後漸増し、平成9年には約90万人にまで回復している(昭和58年と63年の急

減には、調査方法・算出方法の変更があるのかもしれないが、詳細は不明である)。なお『吉野町史』によれば、昭和32年の観光客数は20万余人という⁷⁾から、昭和46年の約40万人までは徐々に増加し⁸⁾、昭和40年代後半から急増したことがうかがえる。

表1 吉野山エリア(宮滝・津風呂湖を含む)への観光客数の推移(昭和46年～)

(単位:人)			
年	観光客数	年	観光客数
昭和46	406,200	昭和60	864,138
47	530,800	61	815,175
48	630,800	62	864,641
49	799,300	63	719,376
50	614,500	平成元	727,000
51	1,037,650	2	743,000
52	1,082,620	3	785,000
53	1,090,020	4	799,000
54	1,093,500	5	804,000
55	1,098,100	6	820,000
56	1,178,000	7	827,000
57	1,164,110	8	877,000
58	857,000	9	901,000
59	887,699		

出典:『奈良県観光客動態調査報告書』昭和61年～平成9年

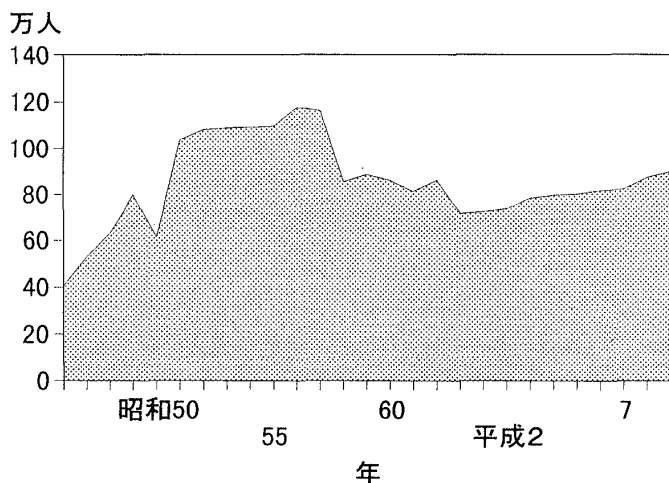


図1 吉野山エリア(宮滝・津風呂湖を含む)への観光客数の推移(昭和46年～)

の数値は、『動態調査報告書』における狭義の吉野山の数値(上述)とほぼ等しい¹¹⁾。平成3年以降のデータを見るかぎり、狭義の吉野山への観光客数は、ここ数年だいたい70万人台前半で推移していると言える。

観光客数については、年代は若干さかのぼるが、昭和50年代に国鉄が集計した統計も『全国観光動向』に掲載されている(表4)。表2と比べると、各年度とも、狭義の吉野山と吉野山

狭義の吉野山への観光客数については、『動態調査報告書』の平成9年版に、「観光施設」としての吉野山の利用者数が、平成8年と平成9年について挙げられている⁹⁾。それによれば、平成8年が715,995人、平成9年が721,340人である。また、『動態調査報告書』の昭和61年～63年版と『全国観光動向』の昭和51年(度)～昭和63年(度)版には、吉野山エリアの調査所ごとの内訳データを掲載しており(表2)、そこから狭義の吉野山への観光客数を読みとることができる。平成元年以降のデータが不十分ではあるが、やはり昭和58年と63年に急減している。

なお、吉野町役場経済観光課の資料では表3のようになっている¹⁰⁾。平成元年から津風呂湖の統計が別になっているが、平成2年より前の吉野山のデータは表1・表2の吉野山エリアの数字とほぼ同じであり、表3における平成2年以前(少なくとも昭和51年以降)の吉野山の数値には宮滝と津風呂湖の分が含まれていると思われる。平成8年と平成9年

表2 吉野山・吉野山エリアへの観光客数の推移（昭和51～63年）

（単位：人）

年	吉野山	宮滝	津風呂湖	吉野山エリア
昭和51	799,090	15,610	222,950	1,037,650
52	817,900	20,000	244,720	1,082,620
53	814,990	26,000	249,070	1,090,020
54	822,100	27,000	244,400	1,093,500
55	825,000	27,500	245,600	1,098,100
56	905,000	28,000	245,000	1,178,000
57	884,130	25,000	254,980	1,164,110
58	742,000	16,300	98,700	857,000
59	735,000	49,302	103,397	887,699
60	729,758	42,998	91,382	864,138
61	723,835	46,362	44,978	815,175
62	734,209	49,900	80,532	864,641
63	586,631	38,100	94,645	719,376

注：平成元年以降、奈良県は調査所ごとの内訳データを公表していない。

出典：『全国観光動向』昭和51年（度）～昭和63年（度）

表3 吉野山への観光客数の推移（昭和49年～）

（単位：人）

年	吉野山	津風呂湖
昭和49	799,000	
50	615,000	
51	1,038,000	
52	1,082,000	
53	1,090,000	
54	1,094,000	
55	1,098,000	
56	1,178,000	
57	1,164,000	
58	857,000	
59	887,000	
60	864,000	
61	815,000	
62	865,000	
63	719,000	
平成元	727,000	91,000
2	743,000	87,000
3	701,000	98,000
4	726,000	102,000
5	741,000	101,000
6	750,000	109,000
7	708,000	105,000
8	716,000	109,000
9	722,000	119,000

出典：吉野町役場経済観光課資料

表4 国鉄の集計による吉野山への観光客数（昭和51～57年度）

（単位：千人）

年度	観光客数
昭和51	847
52	999
53	1,003
54	1,001
55	1,007
56	1,034
57	1,023

出典：『全国観光動向』昭和51年（度）～昭和57年（度）（もとの資料は吉野町観光課提供）

表5 吉野熊野国立公園利用者数（奈良県分）の推移
（昭和25年～）（単位：人）

年	利用者数	年	利用者数
昭和25	529,445	49	1,161,000
26	637,057	50	1,203,000
27	390,300	51	1,312,000
28	943,340	52	1,349,000
29	962,760	53	1,411,000
30	データなし	54	1,393,000
31	データなし	55	1,377,000
32	373,913	56	1,791,000
33	256,000	57	1,637,000
34	291,000	58	1,511,000
35	320,000	59	1,643,000
36	396,000	60	1,556,000
37	377,000	61	1,695,000
38	391,000	62	1,624,000
39	461,000	63	1,420,000
40	506,000	平成元	1,372,000
41	396,000	2	1,424,000
42	511,000	3	1,594,000
43	610,000	4	1,542,000
44	731,000	5	1,592,000
45	866,000	6	1,635,000
46	942,000	7	1,671,000
47	1,020,000	8	1,754,000
48	1,105,000	9	1,961,000

出典：環境庁自然保護局企画調整課自然ふれあい推進室
提供資料

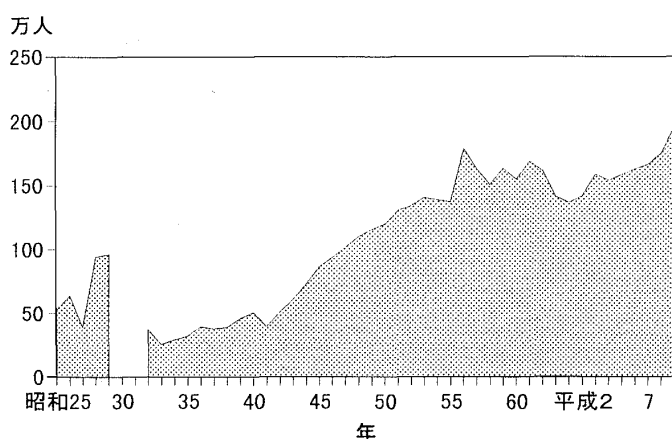


図2 吉野熊野国立公園利用者数（奈良県分）の推移
（昭和25年～）

エリアの中間の値になっており、どちらを対象としたものか特定しがたい。

以上の『動態調査報告書』と『全国観光動向』の統計では、昭和45年以前の観光客数の動向が不明である。そこで、対象となる空間的範囲は広くなるが、吉野熊野国立公園の利用者数を奈良県分に関して見ておくことにしたい¹²⁾。表5と図2に示したように、この統計からは、昭和25年以降の推移が読み取れる。昭和20年代は、データの取り方に混乱があったのか、昭和30年代の傾向と合致しないが、昭和30年代以降の推移を見ると、漸増していた利用者数が、昭和40年代に一気に増加したことが分かる。図3に示したとおり、昭和50年頃、吉野熊野国立公園の奈良県分利用者は、その約半数が吉野山を訪れていた。他の観光地のうち、洞川や山上ヶ岳は、古くからある山上参りの人々が大半を占められるので、昭和40年代の利用者数の急増には、吉野山や昭和38年にできた津風呂湖への観光客の増加が影響していると考えられる。逆に言えば、これによって、昭和40年代における吉野山への観光客の増加が間接的に裏づけられると言えよう。

この昭和40年代の観光客の急増は、いわゆるマイカーの普及に後押しされた面がある。図4は、全国の乗用車・軽自動車保有台数の推移を表し

たものであるが¹³⁾、昭和40年代に急速に台数が増加している。吉野山へも、昭和40年代に自動車での来訪者数が増えて、観桜シーズンには道路の渋滞を引き起こしていることを、堀井は述べている¹⁴⁾。

なお、4月の観桜期間に限れば、吉野警察署が人出の調査を行なっている。表6は、ここ4年間のそのデータであり¹⁵⁾、年により変動があるが(週末の天候に大きく左右されるという)、毎年25～30万人程度の花見客が繰り出している¹⁶⁾。堀井によれば、昭和46年の花シーズンには約24万人だったとのことであり¹⁷⁾、吉野山の桜に対する人気は相変わらず根強いものがある。

2. 公共交通機関利用者数の推移

次に、個々の公共交通機関利用者数の推移を見てみたい。まず表7と図5は、吉野山ロープウェイの輸送人員である。出典である『私鉄統計年報』と『民鉄統計年報』¹⁸⁾には、昭和33～56年度しか、事業者ごとの索道データの記載がない。統計を見ると、昭和30年代中頃と昭和40年代後半に多少増加しているが、おおよそ20万人台で推移しており、あまり目立った変化は見られず、上述の観光客数の動向と一致しない。昭和50年頃以降は減少傾向にあり、平成9年には約14.5万人にまで減っている(後掲の表20参照)。

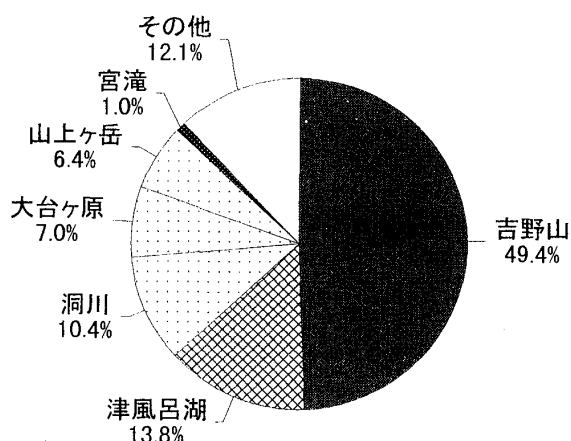


図3 吉野熊野国立公園利用者数（奈良県分）の調査箇所別内訳（昭和51年）

注：各調査箇所の利用者数を合計すると約162万人になり、全体としての国立公園利用者数（奈良県分）約131万人を上回るが、複数の調査箇所を訪れた人をダブルカウントしないよう、数字を調整したものと思われる。

出典：『全国観光動向』昭和51年（度）

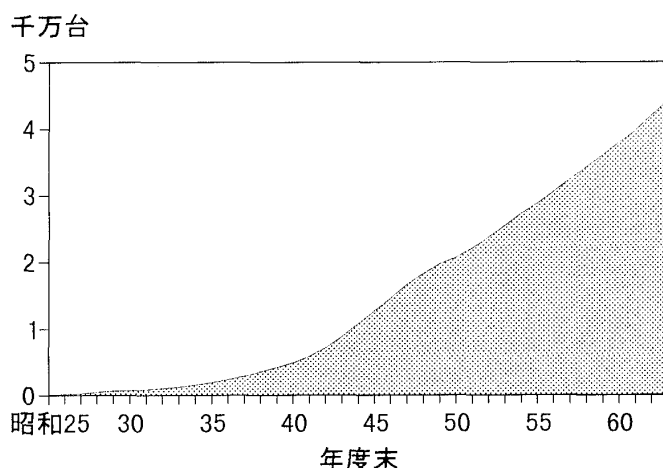


図4 全国の乗用車・軽自動車保有台数の推移（昭和25年度末～）

注：トラック、バス、二輪などは含まない。

出典：『完結昭和国勢総覧』第1巻

表6 吉野山における観桜期間中の人出（平成8年～）
（単位：人、台）

年	人数	バス	その他の車
平成8	315,275	3,622	17,319
9	327,864	2,570	24,651
10	255,000	2,467	16,078
11	288,499	2,918	20,600

注：観桜期間はおおむね4月いっぱいだが、年により多少異なる。

出典：奈良県警察本部地域課提供資料

表7 吉野山ロープウェイ輸送人員の推移(昭和33～56年度)
(単位:人)

年度	輸送人員	年度	輸送人員
昭和33	215,624	昭和45	274,000
34	268,494	46	218,000
35	305,000	47	271,000
36	310,000	48	313,000
37	データなし	49	281,000
38	288,000	50	263,000
39	252,000	51	269,000
40	259,000	52	253,000
41	256,000	53	247,000
42	273,000	54	237,000
43	286,000	55	216,000
44	240,000	56	211,000

注: 昭和57年度以降, 運輸省(近畿運輸局)は事業者ごとのデータを公表していない。

出典: 『私鉄統計年報』昭和33～49年度, 『民鉄統計年報』昭和50～56年度

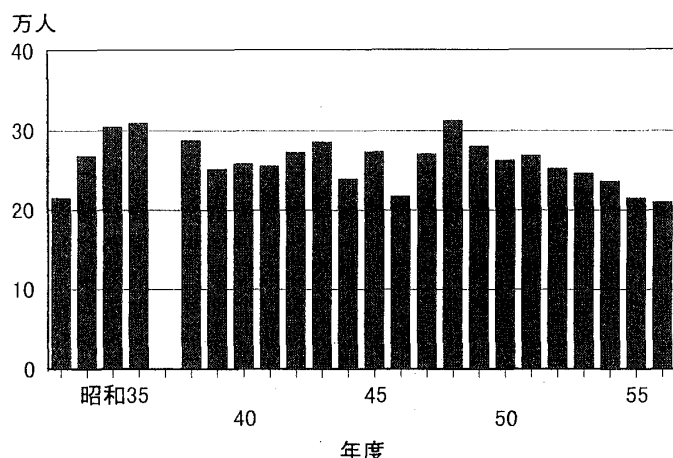


図5 吉野山ロープウェイ輸送人員の推移(昭和33～56年度)

次いで, 近鉄吉野駅の乗車人員を見てみたい¹⁹⁾ (表8, 図6)。観光客が多くを占められる定期外の乗客については, 昭和40年頃までいったん漸減し15万人をきるが, 昭和40年代に急増し, 30万人近くにまで達する。しかし, 昭和60年頃からは再び漸減傾向にある。平成3年の急増は, 同年NHKの大河ドラマで「太平記」が放映されたことの影響であろう。定期の乗客と合わせた総数では, 昭和30年代と平成ともに20万人台後半でありあまり変わらないが, 定期客の減少を定期外の乗客が補っている形になっている。

表9は, 近鉄吉野駅の利用者数から観光入込者数を推計したものである²⁰⁾。昭和60年と61年の数値が以後の数値と大きく異なるのは, 計算方法が違うためであろう。昭和62年以降は, 平成3年に急増した後, 漸減という推計結果になっている。

近鉄吉野駅の乗降者数について

は, 表10のようなデータもある²¹⁾。年間乗降者数は, 出典に記載の1日あたり乗降者数に当該年度の日数を乗じて筆者が求めたものであるが, 表8の数値とは一致せず, 別の資料に依拠していると思われる。

3. 修学旅行客

ところで, 時代はかなりさかのぼるが, 昭和27年～29年の個人・団体種別宿泊者数の統計がある²²⁾ (表11, 図7)。この統計から驚かされるのは, 団体宿泊者数の多さであり, 個人客は約1割にすぎない。団体客では学校関係, それも, 小学生と高校生の団体が圧倒的に多い。小学生は夏の林間学校, 高校生は修学旅行と思われる。

表 8 近鉄吉野駅乗車人員の推移（昭和24年度～）

（単位：人）

年度	定期	定期外	総数	年度	定期	定期外	総数
昭和24	内訳なし (マ)	内訳なし	238,324	昭和49	48,270	271,923	320,193
25	199,320	183,952		50	54,270	274,133	328,403
26	内訳なし	内訳なし	291,163 ^{注1)}	51	51,900	291,590	343,490
27	データなし	データなし	データなし	52	57,030	286,597	343,627
28	102,840	226,175	329,015	53	58,950	282,034	340,984
29	99,300	186,373	285,673	54	56,370	291,102	347,472
30	91,920	184,188	276,108	55	60,270	283,950	344,220
31	99,930	202,799	302,729	56	54,840	284,520	339,360
32	98,940	182,488	281,428	57	48,930	289,880	338,810
33	102,840	199,806	302,646	58	54,780	256,203	310,983
34	94,530	197,921	292,451	59	47,430	284,247	331,677
35	109,410	183,925	293,335	60	41,760	281,496	323,256
36	104,670	171,016	275,686	61	38,790	284,300	323,090
37	111,360	172,199	283,559	62	37,290	230,978	268,268
38	94,560	144,102	238,662	63	34,770	245,794	280,564
39	73,020	162,995	236,015	平成元	33,120	223,387	256,507
40	76,590	168,501	245,091	2	31,680	231,375	263,055
41	82,560	157,709	240,269	3	33,630	293,436	327,066
42	73,920	141,724	215,644	4	32,160	256,652	288,812
43	66,690	165,195	231,885	5	31,830	268,657	300,487
44	56,880	184,324	241,204	6	31,230	247,447	278,677
45	56,460	191,714	248,174	7	32,550	202,231	234,781
46	51,420	206,490	257,910	8	34,440	244,125	278,565
47	49,470	201,527	250,997	9	30,000	237,242	267,242
48	45,210	264,517	309,727				

注1)：降車人員総数は405,718人

出典：『奈良県統計書』昭和25年～27年、『奈良県統計年鑑』昭和28年～平成10年度

表 9 近鉄吉野駅利用者数からの入込者数推計(昭和60年～)

（単位：人）

年	入込者数
昭和60	281,093
61	287,437
62	124,510
63	125,761
平成元	122,474
2	130,151
3	159,276
4	152,705
5	157,621
6	145,943
7	118,952
8	141,060
9	114,065

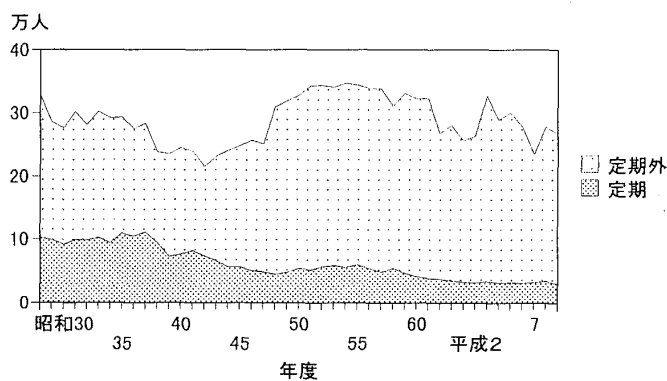
出典：『奈良県観光客動態調査報告書』
昭和61年～平成9年

図 6 近鉄吉野駅乗車人員の推移（昭和28年度～）

表10 近鉄吉野駅乗降者数（平成元年～）

年度	1日あたり乗降者数（人）	年度日数	年間乗降者数（人）	備考
平成元	564	365	205,860	
2	897	365	327,405	
3	666	366	243,756	推計値
4	624	365	227,760	
5	675	365	246,375	推計値
6	670	365	244,550	推計値
7	244	366	89,304	
8	336	365	122,640	推計値

資料：『駅別乗降者数総覧』'96～'99

表11 吉野への個人・団体種類別宿泊者数（昭和27～29年）

（単位：人）

年月		昭和27年 4 月	昭和28年	昭和29年
個人		906	4,286	2,357
団体	一般	1,280	5,686	3,771
	小学校	0	5,973	14,610
	中学校	59	1,558	1,989
	高校	955	14,055	14,903
	学校	1,014	21,586	31,502
宿泊者数合計		2,294	27,272	35,273
		3,200	31,558	37,630

注：昭和28年，29年は，4月，5月，10月，11月は全旅館を対象とする調査であり，その他の月は抽出調査である。

出典：『奈良県統計書』昭和27年，『奈良県統計年鑑』昭和28年～29年

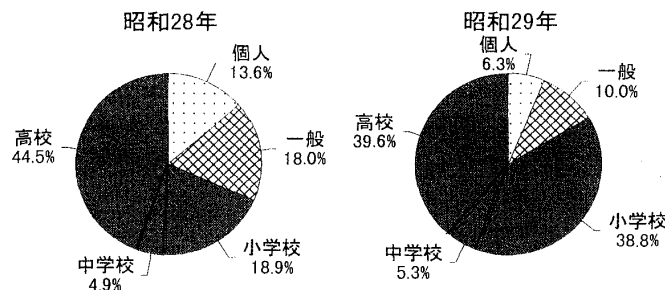


図7 吉野への個人・団体種類別宿泊者数(昭和28～29年)

堀井も、『吉野町史』の中で、修学旅行と林間学校の多さに触れており²³⁾、昭和40年代中頃までの約20年間、中学・高校の修学旅行生は、年間約1万～1.5万人と述べている²⁴⁾。

複数の観光関係者からの聞き取り調査によれば、現在では、修学旅行、林間学校ともに少なくなったという。ただし、それを裏づける具体的な数値は見いだせなかった。年代は若干さかのぼるが、表12のような吉野県税事務所管内の修学旅行生宿泊者数のデータが

表12 修学旅行生宿泊者数（昭和60年～）

（単位：千人）

年	奈良県内全域	うち吉野県税事務所管内
昭和60	670	75
61	674	81
62	698	77
63	693	57
平成元	627	39
2	634	内訳データなし
3	597	〃
4	571	〃
5	537	〃
6	522	〃
7	495	〃
8	474	〃
9	452	〃

出典：『奈良県観光客動態調査報告書』昭和61年～平成9年

ある程度である²⁵⁾。吉野県税事務所管内の宿泊の多くは吉野山泊まりと思われるが、昭和62年から平成元年にかけて半減しており、39,000人に落ち込んでいる。

4. 観光客の出発地

次に、観光客の出発地について見ておきたい。まず『全国観光動向』²⁶⁾から、国鉄の集計による吉野山への出発地別観光客数を見してみる（表13）。昭和51～57年度のデータしかないが、おおまかな傾向は看取される。図8は、そのうち昭和57年度のデータをグラフ化したものであり、京阪神と奈良県内で約4分の3を占めていることが分かる。

図9は、奈良県立商科大学が行なった奈良県の観光調査のうちから吉野山の分を引用したものである²⁷⁾。平成7年11月18日（土）～19日（日）に、吉野山ロープウェイ千本口駅前でも面接調査した結果であり、被調査者の総数が93名と少ないこと、調査地点の関係でマイカーによる観光客がほとんど把握されていないこと²⁸⁾などの問題はあるが、図8と同じように、近畿の府県からの来訪者が大部分を占めている。特に大阪府から訪れている人が半数以上にのぼっている。

筆者も、平成11年4月25日（日）午後2時25分～2時45分に、下千本にある吉野山駐車場で、駐車自動車（ほとんどは乗用車）のナンバープレート調査を行なった。観桜のピークを過ぎており、観光客が最大の時期ではなかったが、おおよその傾向は把握できるであろう。

結果は表14のとおりである。やはり大阪府が40%以上を占めており、特に和泉ナンバーが多い。和泉ナンバーは、大阪府南部（堺市・松原市・藤井寺市・柏原市より南）の自動車であり、鉄道機関によるアクセスの悪さも一因しているかもしれない。次いで奈良県が第2位であるが、奈良ナンバーの自動車には露店営業者のものと思われるワゴン車なども含まれており、観光客の車の台数はこれより若干少ない。以下、兵庫県・和歌山県と続き、近畿の府県からの来訪者

表13 国鉄の集計による吉野山への出発地別観光客数（昭和51～57年度）

（単位：千人）

年度	関東	中部	関西	（うち京阪神）	（うち県内）	九州	その他	合計
昭和51	34	86	631			96	—	847
52	48	113	731			107	—	999
53	26	115	742			—	120	1,003
54	24	113	743			—	121	1,001
55	29	135	731			—	112	1,007
56	32	136	749	(421)	(328)	—	117	1,034
57	31	127	754	(436)	(318)	—	111	1,023

注：中部は昭和56年度より中京と表記される。

出典：『全国観光動向』昭和51年（度）～昭和57年（度）（もとの資料は吉野町観光課提供）

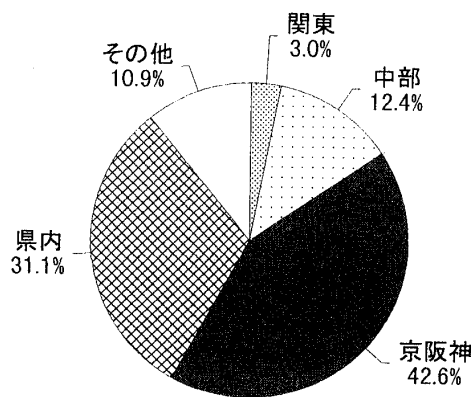


図8 国鉄の集計による吉野山への観光客の出発地別比率（昭和57年度）

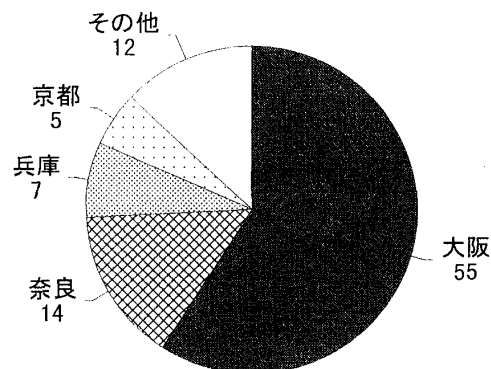


図9 吉野山への出発地別観光客数（平成7年）

注：平成7年11月18日～19日、吉野山ロープウェイ千本口駅前で面接調査したもの。

出典：『奈良観光の実態分析』

表14 府県別駐車自動車台数（平成11年）

府県名	台数（台）	比率（％）	ナンバープレート（陸運支局等）別内訳
大阪	73	41.2	和泉：34，なにわ：21，大阪：18
奈良	41	23.2	
兵庫	14	7.9	神戸：13，姫路：1
和歌山	12	6.8	
愛知	8	4.5	名古屋：8
三重	8	4.5	三重：8
京都	7	4.0	
滋賀	3	1.7	
岐阜	2	1.1	岐阜：2
その他	9	5.1	
合計	177	100.0	

注：バス2台，バイク2台を含む。

資料：筆者の計数による（平成11年4月25日，於吉野山駐車場）

が大半を占めている。

ただし、これらは自動車で訪れる観光客に限った話で、近畿地方より遠い地方から来る人は鉄道などを利用するのが普通であろう。したがって、観光客全体の居住地の傾向とは異なる可能性があることに注意しておかねばならない。

なお、宿泊者に限れば、春は、一度吉野山の桜を見てみたいという首都圏からの観光客の方が多いという。夏は、研修・合宿や家族旅行で訪れる関西方面からの宿泊客も多くなるとのことである（複数の宿泊施設関係者からの聞き取りによる）。

Ⅲ. 吉野山観光の季節性

1. 観光客数の季節性

本章では、観光客の季節性について見ておきたい。吉野山の観光が観桜を中心とした春に集中していることは『吉野町史』でも指摘されているが、ここでは筆者の入手しえたデータを提示しておくことにしたい。

まず、Ⅱ章でも利用した『動態調査報告書』²⁹⁾掲載の月別観光客数を取りあげる（表15）。この統計単位の「吉野山」が宮滝・津風呂湖を含んだ吉野山エリアであることは、上述のとおりである。

表15のデータのうち、最新の平成9年のものをグラフ化したものが図10である。これを見ると、やはり4月の観桜シーズンが飛び抜けて多いことが分かる（38.4%）。続いて秋と夏であり、6月と冬は極端に観光客数が少ない。

図11は、平成2年以降の月別観光客数の割合がどのように推移しているかをグラフにしたものである。この図によれば、平成7年以降4月の比率が急減し、かわって9～12月の観光客の割

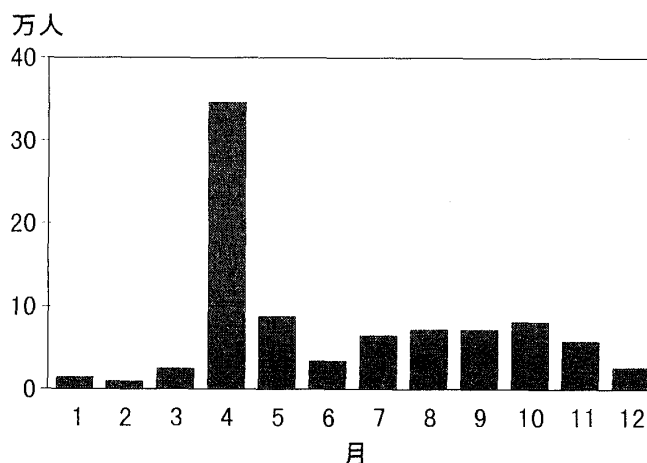


図10 吉野山エリア（宮滝・津風呂湖を含む）への月別観光客数（平成9年）

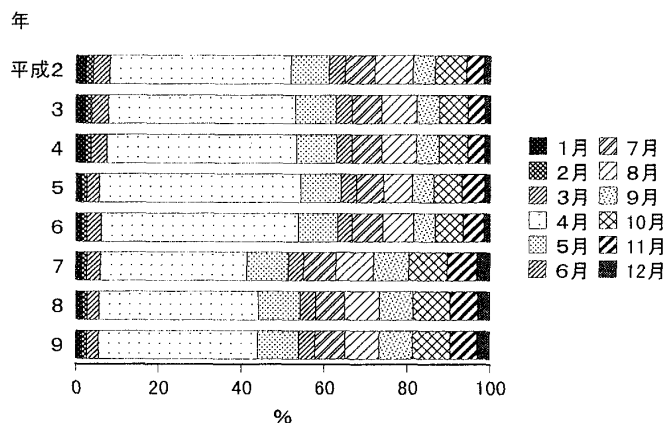


図11 吉野山エリア（宮滝・津風呂湖を含む）への月別観光客数の比率とその推移（平成2年～）

表15 吉野山エリア（宮滝・津風呂湖を含む）への月別観光客数とその比率（平成2年～）

(単位：人)

年	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9
1月	19,000	19,000	19,000	12,000	13,000	13,000	15,000	15,000
2月	13,000	12,000	11,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
3月	30,000	31,000	31,000	24,000	28,000	27,000	25,000	26,000
4月	324,000	354,000	365,000	391,000	390,000	292,000	337,000	346,000
5月	68,000	77,000	78,000	78,000	78,000	83,000	88,000	89,000
6月	29,000	30,000	29,000	30,000	29,000	30,000	33,000	35,000
7月	53,000	56,000	57,000	52,000	60,000	65,000	62,000	66,000
8月	68,000	66,000	67,000	56,000	61,000	75,000	73,000	73,000
9月	39,000	43,000	43,000	41,000	43,000	70,000	71,000	73,000
10月	57,000	54,000	56,000	55,000	55,000	77,000	79,000	82,000
11月	31,000	32,000	32,000	44,000	41,000	59,000	58,000	59,000
12月	12,000	11,000	11,000	11,000	12,000	26,000	26,000	27,000
年計	743,000	785,000	799,000	804,000	820,000	827,000	877,000	901,000
1月 (比率)	2.6	2.4	2.4	1.5	1.6	1.6	1.7	1.7
2月	1.7	1.5	1.4	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1
3月	4.0	3.9	3.9	3.0	3.4	3.3	2.9	2.9
4月	43.6	45.1	45.7	48.6	47.6	35.3	38.4	38.4
5月	9.2	9.8	9.8	9.7	9.5	10.0	10.0	9.9
6月	3.9	3.8	3.6	3.7	3.5	3.6	3.8	3.9
7月	7.1	7.1	7.1	6.5	7.3	7.9	7.1	7.3
8月	9.2	8.4	8.4	7.0	7.4	9.1	8.3	8.1
9月	5.2	5.5	5.4	5.1	5.2	8.5	8.1	8.1
10月	7.7	6.9	7.0	6.8	6.7	9.3	9.0	9.1
11月	4.2	4.1	4.0	5.5	5.0	7.1	6.6	6.5
12月	1.6	1.4	1.4	1.4	1.5	3.1	3.0	3.0
年計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出典：『奈良県観光客動態調査報告書』平成2年～平成9年

表16 国鉄の集計による吉野山への月別観光客数とその比率（昭和51～57年度）

（単位：千人）

年度	昭和51	昭和52	昭和53	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57
4月	430	478	479	475	464	485	478
5月	50	59	60	59	61	63	61
6月	33	37	38	39	37	35	37
7月	80	89	88	93	99	97	97
8月	60	80	76	79	82	90	87
9月	30	43	44	43	41	35	39
10月	30	40	41	41	58	47	48
11月	40	45	46	38	43	52	47
12月	23	28	29	28	27	22	24
1月	21	32	32	34	28	29	32
2月	20	28	27	28	26	27	25
3月	30	40	43	44	41	52	48
年計	847	999	1,003	1,001	1,007	1,034	1,023
4月（比率）	50.8	47.8	47.8	47.5	46.1	46.9	46.7
5月	5.9	5.9	6.0	5.9	6.1	6.1	6.0
6月	3.9	3.7	3.8	3.9	3.7	3.4	3.6
7月	9.4	8.9	8.8	9.3	9.8	9.4	9.5
8月	7.1	8.0	7.6	7.9	8.1	8.7	8.5
9月	3.5	4.3	4.4	4.3	4.1	3.4	3.8
10月	3.5	4.0	4.1	4.1	5.8	4.5	4.7
11月	4.7	4.5	4.6	3.8	4.3	5.0	4.6
12月	2.7	2.8	2.9	2.8	2.7	2.1	2.3
1月	2.5	3.2	3.2	3.4	2.8	2.8	3.1
2月	2.4	2.8	2.7	2.8	2.6	2.6	2.4
3月	3.5	4.0	4.3	4.4	4.1	5.0	4.7
年計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出典：『全国観光動向』昭和51年（度）～昭和57年（度）（もとの資料は吉野町観光課提供）

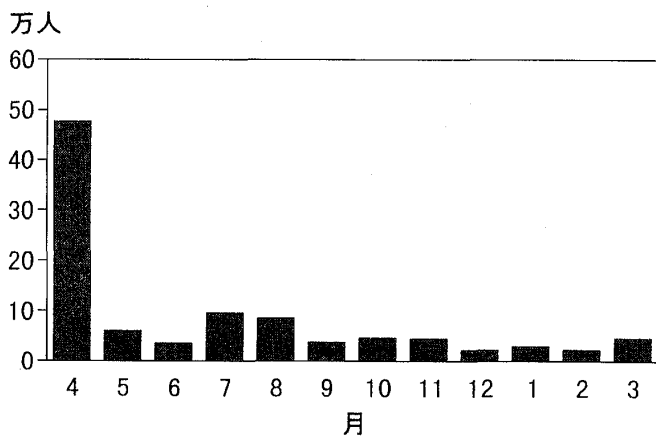


図12 国鉄の集計による吉野山への月別観光客数
(昭和57年度)

表17 吉野山(エリア)への月別観光客比率
(昭和51～57年度, 平成2～9年)
(単位: %)

月	吉野山 昭和51～57年度平均	吉野山エリア 平成2～9年平均
1	3.0	1.9
2	2.6	1.3
3	4.3	3.4
4	47.1	42.8
5	6.0	9.7
6	3.7	3.7
7	9.3	7.2
8	8.0	8.2
9	4.0	6.4
10	4.4	7.8
11	4.5	5.4
12	2.6	2.0

資料: 表15, 表16

合が増えたことがうかがえる。表15の実数レベルでも、やはり4月の減少と9月以降の季節の増加が著しい。花見客の急減には、平成7年1月に起きた阪神・淡路大震災が影響していると考えられる。

『全国観光動向』³⁰⁾には、昭和50年代ではあるが、国鉄の集計による月別観光客数も示されている。表16がそれをまとめたものであり、このうち昭和57年度のデータをグラフにすると、図12のようになる。先の図10に比べて、4月の突出が飛び抜けているのが目につく。

そこで、表15の平成期と表16の昭和50年代を比べるために、表17を作成した。これは、それぞれの年代について、月別比率の平均を求めたものである。昭和50年代から平成期になって4月の割合が減少し、かわって5月と9月・10月が増加していると言える。しかしながら、注意しておかねばならないのは、表16の昭和50年代の吉野山は狭義の吉野山の可能性もあるのに対し（その詳細については、Ⅱ章1節で述べた）、

表15の平成期の統計は、それより広い吉野山エリアのデータであるということである。したがって、表17は、時代的变化ではなく、集計範囲の広狭による相違と解釈することもできる。実際のところ、津風呂湖の観光は春から秋がシーズンで、特に5月頃が最も賑わうといい³¹⁾、後の解釈が的はずれではないことを証している。

2. 施設利用者数の季節性

次に、個別の施設の利用者数から季節変化を見てみたい。まず、吉野町営の国民宿舎吉野山荘³²⁾の月別宿泊者数を表18に示した³³⁾。これをグラフ化したものが、図13である。やはり4月の宿泊者数の多さと冬季の極端な少なさが目につくが、上述の観光客数の季節変化に比べると、

表18 国民宿舎吉野山荘の月別宿泊者数
(平成9年度)

月	宿泊者数 (人)	比率 (%)
4	1,768	23.5
5	665	8.9
6	430	5.7
7	527	7.0
8	1,102	14.7
9	567	7.6
10	723	9.6
11	767	10.2
12	150	2.0
1	110	1.5
2	128	1.7
3	572	7.6
合計	7,509	100.0

出典：国民宿舎吉野山荘資料

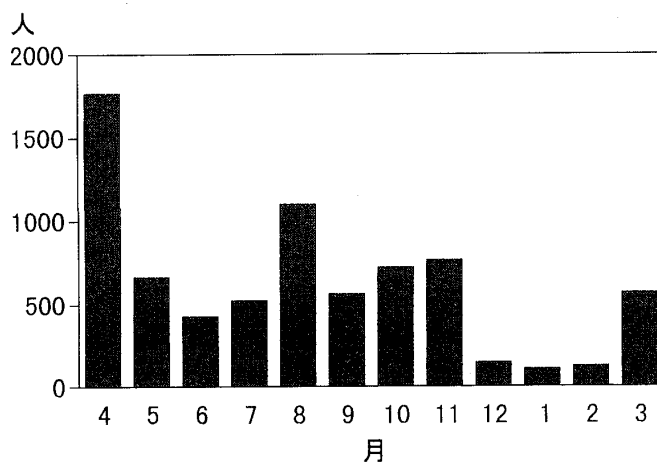


図13 国民宿舎吉野山荘の月別宿泊者数 (平成9年度)

表19 吉野山ビジターセンターの月別
入館者数 (平成9年度)

月	入館者数 (人)	比率 (%)
4	732	39.2
5	143	7.7
6	84	4.5
7	93	5.0
8	155	8.3
9	97	5.2
10	146	7.8
11	163	8.7
12	53	2.8
1	17	0.9
2	39	2.1
3	144	7.7
合計	1,866	100.0

出典：吉野町役場経済観光課資料

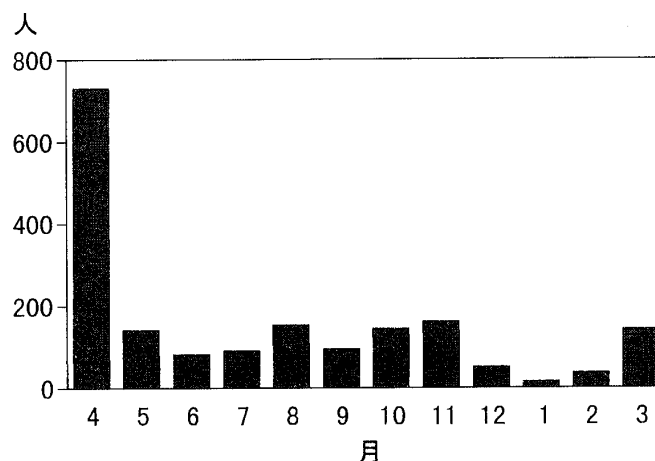


図14 吉野山ビジターセンターの月別入館者数 (平成9年度)

4月の比率が低く (23.5%), 8月をはじめ, 秋 (10月・11月) や5月にもそこその宿泊者がいることが分かる。もっとも, 4月は早めに予約をしないと宿泊は不可能であり, 需要という面から見れば, より多くの宿泊希望者が存在する。なお, 国民宿舎吉野山荘は低料金で個人宿泊客を受け入れるため, 仕事で訪れた人のビジネスホテル的役割も果たしていた。そのため, 一般の観光旅館は若干これとは傾向が異なるであろうことを付言しておきたい。

吉野山荘とともに吉野町が管理している吉野山ビジターセンターの月別入館者数は, 表19と図14のとおりである³⁴⁾。4月の占める割合は約4割であり, あとは3月・5月・8月・10月・11月に多少の入館者が見られる程度である。ビジターセンターは, 滞在期間 (日帰りか宿泊か),

表20 吉野山ロープウェイの月別延べ乗客数（平成9年）

月	定期外（人）	比率（％）	定期（人）	合計（人）
1	5,415	(4.0)	840	6,255
2	3,058	(2.3)	60	3,118
3	7,227	(5.3)	1,200	8,427
4	67,249	(49.7)	1,320	68,569
5	10,342	(7.6)	480	10,822
6	5,459	(4.0)	960	6,419
7	6,102	(4.5)	840	6,942
8	7,777	(5.7)	60	7,837
9	4,692	(3.5)	1,680	6,372
10	10,441	(7.7)	1,080	11,521
11	3,881	(2.9)	120	4,001
12	3,637	(2.7)	1,140	4,777
合計	135,280	(100.0)	9,780	145,060

注：定期券による乗車は60回/月でカウントし、発売月に一括している。

資料：吉野大峯ケーブル自動車（株）乗車券発売記録

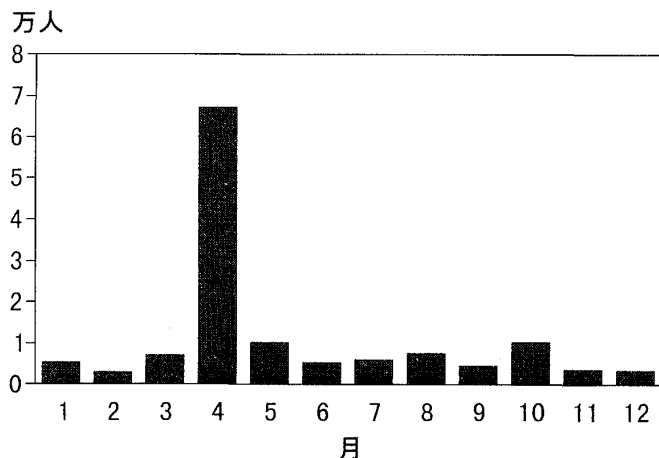


図15 吉野山ロープウェイの月別延べ乗客数(平成9年)
注：定期客を除く。

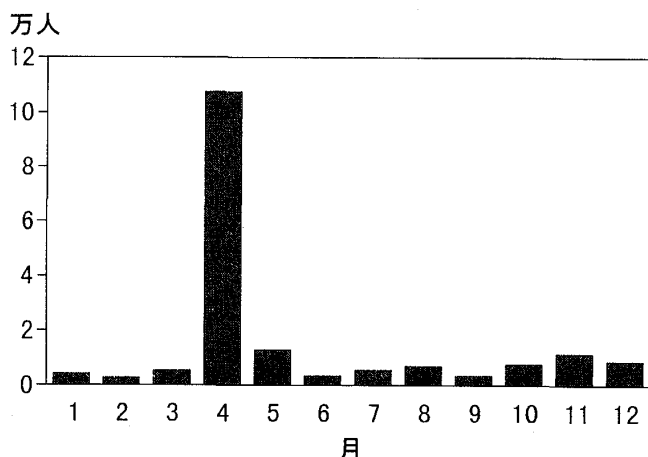


図16 近鉄吉野駅の月別降車人員（平成9年）
注：集札数であり、定期券利用者を除く。
資料：近鉄吉野駅記録

利用交通手段（自動車か鉄道か）

の違いの影響をあまり受けないと考えられるため、入館者数の月別変化が吉野山観光全体の季節性を最もよく反映していると思われる。4月の入館者比率は、吉野山エリアの観光客比率（表15・図10）ともほぼ合致する。

公共交通機関としては、まず吉野山ロープウェイの月別乗客数を、表20と図15に示した³⁵⁾。

定期外の乗客数は約13.5万人であるが、上りと下りの乗客数を合計しているため、正味の利用者数はこれの半分強、つまり約7～8万人と考えられる。月別では、4月の占める割合がやはり高く、約50%にもなる。なお、昭和51年頃には、年間乗客数が約25万人（これは表7でも裏づけられる）、4月の乗客数が約7万人だったという³⁶⁾。4月の乗客数は現在とあまり変わらないが、年間乗客数が現在の2倍近い。4月以外の観光客が交通手段として自動車を利用するようになったため、観桜シーズン以外の乗客数が減少したのであろう。

もうひとつの公共交通機関・近鉄の吉野駅降車人員³⁷⁾の場合は、もっと4月への集中が見られる。図16がそのデータであるが、4月の降車人員は約10.8万人で、年間総降車人員約18.4万人³⁸⁾の60%近くにもなっている³⁹⁾。4月は、道路の混雑や花見

での飲酒などの理由から、自動車を避けて鉄道利用に流れる人がいるため、このような過度の集中をすることになるのであろう。なお降車人員が、吉野駅に接続するロープウェイの実質乗客数に比べてかなり多いのは、吉野駅近くの住民が近鉄しか利用しないことのほかに、観桜シーズンに、吉野駅から如意輪寺前を通して中千本まで行く奈良交通の臨時バスが出ること、吉野駅まで自動車で送迎する場合があることなどによると考えられる。観桜期間中に臨時バスが大量の花見客を輸送していることを考慮すると、公共交通機関を使った観光客の季節性は、近鉄吉野駅降車人員の方が実態に近いと思われる。

3. 昭和20年代の季節性

ところで、昭和20年代における吉野駅の月別降車人員の統計がある⁴⁰⁾（表21，図17）。生のデータではなく、観光客数を推計したものではあるが、4月がやはり多い。しかし、現在（図16）のような極端な集中はしておらず、それに代わって5月の多さが目につく。5月は、昭和26年・27年とも年間総降車人員の2割弱を占めており、4月の約半数である。当時は自動車がまだ普及していなかったため、自動車利用に観光客が流れた後の図16とは異なるという解釈もできようが、観光客全体の季節性を反映していると思われるビジターセンター入館者（図14）の傾向と比べても、5月の多さが目立っている。

同じように、表22と図18は、昭和28年における吉野への月別観光宿泊者数を表したものである⁴¹⁾。総数としては4月が最も多いが、5月と8月もこれに近づいている。ただし、Ⅱ章3節で述べたように、この当時の宿泊客は、学校関係の団体が非常に多かった。表22を見て分かるように、高校の修学旅行は4月と5月に集中しており、小学校の林間学校は圧倒的に8月である。これらの学校関係の宿泊者を除くと、4月は全体の約42%を占めて抜きんでた形となり、次いで5月が2割近くを占めている。5月は全旅館の悉皆調査であるということを差し引いても、5月の多さは否定できない。先の吉野駅降車人員データとも合わせて考えると、昭和20年代後半には、現在と比べて、5月に訪れる一般観光客の割合が多かったと言える。

IV. おわりに

以上本稿では、吉野山の観光について、特に観光客数の推移・出発地・季節性などの点から述べてきた。

観光客数の推移については、昭和40年代に急増したこと、（調査・算出方法の変更によるかもしれないが）昭和58年と63年に急減し、平成に入ってから70万人台前半で推移していることが明らかになった。公共交通機関の利用者数は、ロープウェイ・近鉄ともに近年減少傾向にある。また、修学旅行客も減りつつある。

観光客の出発地については、大阪府を中心とする近畿の府県が大半を占めている。

表21 近鉄吉野駅月別観光客降車人員
(昭和26～27年) (単位：千人)

月	昭和26年	昭和27年
1	2	5
2	2	5
3	6	6
4	74	50
5	32	28
6	8	8
7	6	15
8	5	16
9	8	8
10	9	13
11	9	8
12	0	4
合計	161	166

注：駅降車人員に、各月ごとに定めた観光客比率を乗じて算出したものである。

注：出典では、昭和26年の総数が166千人になっているが、各月の合計と合致しないので、後者の数値を採用した。

出典：『奈良県統計書』昭和27年、『奈良県統計年鑑』昭和28年

万人

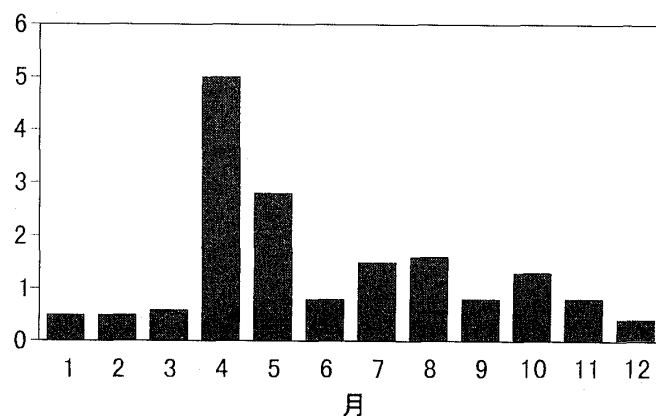


図17 近鉄吉野駅の月別観光客降車人員 (昭和27年)

千人

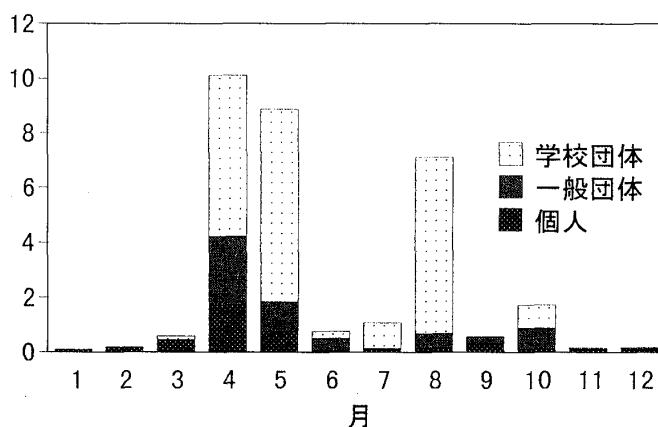


図18 吉野への月別観光宿泊者数 (昭和28年)

表22 吉野への月別観光宿泊者数 (昭和28年)

(単位：人)

月	総数	個人	一般団体	学校団体	学校団体		
					小学校	中学校	高校
1	109	109	0	0	0	0	0
2	201	201	0	0	0	0	0
3	599	451	0	148	0	0	148
4	10,113	1,739	2,484	5,890	0	173	5,717
5	8,858	779	1,068	7,011	0	0	7,011
6	774	53	452	269	0	0	269
7	1,090	107	39	944	701	123	120
8	7,113	169	522	6,422	5,160	1,262	0
9	589	312	277	0	0	0	0
10	1,736	148	736	852	112	0	740
11	181	113	18	50	0	0	50
12	195	105	90	0	0	0	0
合計	31,558	4,286	5,686	21,586	5,973	1,558	14,055

注：4月、5月、10月、11月は19の全旅館を対象とする悉皆調査であり、その他の月は7つの旅館での標本調査である。

出典：『昭和28年観光調査結果概要』

観光客の季節性に関しては、4月が圧倒的に多いが、利用施設によって割合はかなり異なる。観光客全体の動向を反映していると思われるビジターセンターでは、約4割が4月に訪れている。なお、昭和20年代後半には、5月も4月に次いで観光客の多い月であった。

今後の研究課題としては、このような観光客を受け入れる側の観光産業（旅館・土産物店等）の展開、観光地の整備などが挙げられる。別稿を期したい。

〔付記〕

本研究を進めるにあたって、吉野町役場経済観光課・山本茂之氏、元吉野町立国民宿舎吉野山荘支配人・吉田輝夫氏、元吉野町役場経済観光課・桐井雅行氏、吉野町広報室・射場正典氏、竹林院群芳園・福井逸生氏、近鉄吉野駅、吉野大峯ケーブル自動車、吉野警察署、奈良県文化観光課、奈良県警察本部地域課、環境庁自然保護局企画調整課、その他多くの方々や機関にお世話になった。また、今はなき国民宿舎吉野山荘の職員の方々には、投宿のたびに暖かくもてなしていただいた。厚くお礼を申し上げたい。

なお、本研究費用の一部に、平成10年度駒澤大学特別研究助成金を使用した。

注

- 1) 堀井甚一郎「遊覧観光の発達」「観光客」「観光産業」（吉野町史編集委員会編『吉野町史・下巻』、吉野町役場、1972）205～223頁。
- 2) 吉野山については以前、農業的土地利用に関して拙論を発表したことがある。小田匡保「吉野山における農業的土地利用とその変化」、駒澤地理28、1992、45～74頁。
- 3) 『全国観光動向』昭和51年（度）～平成9年（度）（年刊）、日本観光協会、1977～1999。なお、これ以前には『観光要覧』の名前で、同じく日本観光協会から地域別の観光客数の統計が公表されていたが、奈良県についてはきちんとしたデータが挙げられていない。
- 4) 『奈良県観光客動態調査報告書』昭和61年～平成9年（年刊）、奈良県企画部観光課（平成8年から文化観光課）、1987～1998？、奈良県県政情報センター所蔵。
- 5) 昭和61年～63年の『動態調査報告書』では、「吉野山」地域の中で、さらに吉野山・宮滝・津風呂湖の各調査所ごとの内訳が示されている。
- 6) 『動態調査報告書』の昭和61年版には、昭和46年からの数値が挙げられている。
- 7) 『吉野町史・下巻』、前掲注1）212頁。なお、昭和32年には津風呂湖はまだできておらず、宮滝も観光地としてはまだ注目されていないので、この数字は狭義の吉野山のものと見てよい。
- 8) 昭和39年度に、吉野区（津の誤植か）風呂地区の数字として、33万人の観光客数が報告されている（データは奈良県の提供によるものである）。『観光要覧』昭和40年度版、日本観光協会、1966、174頁。
- 9) 平成8年版以前には吉野山の項目が設けられておらず、平成7年以前の吉野山の数値は不明である。
- 10) 原資料では年度単位のデータとされているが、本文中で述べるように、暦年単位の『動態調査報告書』と一致する数値が多いため、表3では暦年ごとのデータとして表示する。
- 11) 『動態調査報告書』を作成する奈良県企画部文化観光課では、市町村からの報告をまとめるので

はなく、交通機関や駐車場、観光施設などの利用状況から独自に観光客数を推計している。しかし、吉野山に関しては、吉野町から奈良県農林部治山課に報告された国立公園利用者数を採用しているという。

- 12) 環境庁自然保護局企画調整課自然ふれあい推進室の提供資料による。なお近年のデータは、『自然公園等利用者数調』（旧称：『自然公園利用状況調』）に掲載されている。本資料は、国立国会図書館、環境庁図書館に断片的に所蔵されている。
- 13) 東洋経済新報社編『完結昭和国勢総覧』第1巻，東洋経済新報社，1991，502頁による。
- 14) 『吉野町史・下巻』，前掲注1）210頁，213～214頁。
- 15) 奈良県警察本部地域課から提供された資料による。
- 16) 吉野警察署で聞いた話では，バスは1台50人，その他の車は1台3人として計算するという。これに，近鉄より報告を受けた乗降客数を加えて人数を算出するとのことである。
- 17) 『吉野町史・下巻』，前掲注1）214頁。
- 18) 運輸省鉄道監督局監修『私鉄統計年報』昭和33～49年度（年刊），日本法制資料出版社ほか，1959～1976。運輸省鉄道監督局監修『民鉄統計年報』昭和50～56年度（年刊），政府資料等普及調査会，1977～1983。
- 19) 『奈良県統計書』昭和25年～27年（年刊），1951～1954。『奈良県統計年鑑』昭和28年～平成10年度（年刊，昭和56年度は欠番），1955～1999。
- 20) 『動態調査報告書』昭和61年～平成9年，前掲注4）。
- 21) 『駅別乗降者数総覧』1996年版～'99（年刊），エース総合研究所，1996～1998。
- 22) 『奈良県統計書』昭和27年，『奈良県統計年鑑』昭和28年～29年。出典には「吉野」とあるが，吉野山を指していると思われる。
- 23) 『吉野町史・下巻』，前掲注1）214～216頁。
- 24) 昭和42年には，中学校が11件（1,577人），高校が51件（15,015人），吉野（長谷・室生を含む）に宿泊している。堀井が引用した昭和42年の日本修学旅行協会の調査は，『臨時増刊 修学旅行』（『修学旅行』152号），日本修学旅行協会，1969，に詳しく報告されている。これは，全国の中学・高校に対する修学旅行実態調査（悉皆調査）であり，精度は高い。
- 25) 『動態調査報告書』昭和61年～平成9年，前掲注4）。
- 26) 『全国観光動向』昭和51年（度）～昭和57年（度），前掲注3）。
- 27) 『奈良観光の実態分析』，奈良県立商科大学，1996，奈良県県政情報センター所蔵。
- 28) 幹線交通手段（複数回答）は，有効回答数86のうち私鉄74，マイカー8，県内交通手段（複数回答）は，有効回答数51のうち鉄道38，マイカー6である。
- 29) 『動態調査報告書』平成2年～平成9年，前掲注4）。『動態調査報告書』の平成元年版以前には，月別観光客数の記載がない。
- 30) 『全国観光動向』昭和51年（度）～昭和57年（度），前掲注3）。
- 31) 『吉野町史・下巻』，前掲注1）219頁。
- 32) 国民宿舎吉野山荘は，平成10年9月に閉館した。
- 33) 国民宿舎吉野山荘の内部資料による。
- 34) 吉野町経済観光課の資料による。
- 35) 乗車券の発売記録による。
- 36) 吉野町企画課編集『広報よしの』第224号，吉野町役場，1977年4月，吉野町広報室所蔵。吉野大峯ケーブル自動車（株）の当時の社長談として記されている。
- 37) 近鉄吉野駅の記録による。改札で回収された切符の枚数であり，定期券利用者は含まれていない。
- 38) 表8に示す吉野駅乗車人員（定期外）に比べて少ないが，理由ははっきりしない。近鉄から下車

してタクシーを利用する場合、タクシーの常駐する吉野神宮駅になることも関係しているかもしれない。

- 39) 『吉野町史・下巻』, 前掲注1) 212頁掲載のグラフから, 昭和45年吉野駅乗車客数(定期外)の月別数値を読み取ると, 4月は約4万人で, 年間合計約9.4万人の40%強になる。表8の数字と大きく違うのが気になるが, 4月への集中は現在ほどではなかったことになる。
- 40) 『奈良県統計書』昭和27年, 『奈良県統計年鑑』昭和28年。
- 41) 『昭和28年観光調査結果概要』, 奈良県総務部調査課, 1954, 奈良県立奈良図書館所蔵。注22)と同じく, 出典には「吉野」とあるが, 吉野山を指していると思われる。

Historical Change and Seasonal Variation of Tourist Arrival in Yoshinoyama, Nara Prefecture, after the Second World War

Masayasu ODA*

Yoshinoyama in Nara Prefecture has long been one of the main tourist attractions for its cherry blossoms and historic places. It is also a part of the Yoshinokumano National Park. This paper clarifies historical change and seasonal variation of tourist arrival and origins of the tourists after the Second World War.

The findings are as follows:

1. The tourist arrival increased rapidly around 1970 partly due to the spread of private cars, and decreased somehow in 1983 and 1988. In recent years, 700 to 750 thousand people visited Yoshinoyama every year.
2. Many of the tourists come from Kinki region surrounding Yoshinoyama, particularly from Osaka Prefecture.
3. April is the most favorite month among tourists, because they come to see cherry blossoms. About forty percent of the tourists seem to visit Yoshinoyama in April.